

Team Megmilk Snow Brand



▲雪印メグミルクスキー部 (同社ホームページから)

つて、空いている高田氏の隣に席を移し、厚かましくも「大関大乃国の後援会長を御社で引き受けてもらえないか」と切り出したのだ。きよとんとする高田オーナーにさらに言葉を継いだ。「大乃国は十勝の芽室町出身です。毎日牛乳を飲んでいたのでから大きくなれた」とは本人の口癖です。必ず横綱になれる大器です。有力企業の後援会長が必要で、雪印さんはぴったりです」

この話が山本社長に伝わり、ほどなくして雪印は後援会長を引き

受け、地方場所や巡業の際には、必ず雪印の支社や支店、関連会社との食事を開催してもらったり、乳製品や肉類が大乃国のいた放駒部屋に届くようになった。大乃国はこれに奮起。東京場所で初優勝を全

山本社長時代にスポーツ支援

山本氏は、1909 (明治42) 年生まれの道産子。中央大学を卒業後、1931 (昭和6) 年に雪印乳業の前身である北海道製酪販売組合連合会に入り、1973 (昭和48) 年

から雪印乳業社長を務めた。冷凍食品などにも手を広げるなど経営の多角化をはかり、日本乳製品協会会長も務めた。スポーツ好きで知られ、山本氏のもとでスポー

時の雪印乳業社長・山本庸一氏だった。実はその2年ほど前、大乃国が大関に昇進する際、「社長にぜひ、後援会長になっていただけませんか」と直訴したのが筆者 (黒田) だった。1986年の初夏だったと記憶している。アイスホッケーと大相撲を道新スポーツ記者として東京で担当していた筆者は、羽田から千歳に向かう飛行機の中に雪印乳業役員で、当時アイスホッケー部のオーナーだった高田哲夫氏の姿を見つけた。羽田空港を離陸し、シートベルトのサインが消えたところを見計らった高田哲夫氏の姿を見つけた。かつての雪印乳業は、アイスホッケー部を岩倉組の廃部に伴って引き受けて、選手強化にお金を惜しまなかった。年間5億円以上ともいわれるアイスホッケーチームの運営費も広告宣伝費として考えれば安いものだったに違いない。試合会場では、ブルーのミニスカートに身を包んだチアガールが「ゆきじるし」を連呼していたのを思い出す。陸上部は実業団駅伝などで活躍した。だが、食中毒事件から2ヵ月半後、会社はアイスホッケー部と陸上部にそのシーズン限りでの廃部を通告した。

スポーツ力でトップの座奪還を



特集

反撃の「雪印」

終章

「雪印」は、かつてアイスホッケー部、陸上部、スキー部を持ち、北海道のスポーツをけん引する立場にあった。食中毒事件によってジャンプ競技のスキー部だけは存続させたが、あの事件から21年を経て、雪印復活の大きなカギを握っているのがこのスキー部の活躍。健康とスポーツに牛乳は欠かせない栄養素であり、「スノーブランド」のブルーのパッケージが再びスパーに並ぶ日を道民は待ち望んでいる。

(本誌特別取材班十黒田 伸)

新横綱・照ノ富士が誕生した大相撲名古屋場所。賜杯を授与する八角理事長 (元横綱北勝海) と、コロナ対策などでテレビにたびたび登場する広報担当理事の芝田山親方 (元横綱大乃国) は、いずれも十勝出身。

大乃国が初優勝した1987 (昭和62) 年5月場所、両国国技館の東支度部屋で賜杯を抱く大関・大乃国 (当時) のすぐ横で万歳三唱をしていたのが、当

時の雪印乳業社長・山本庸一氏だった。実はその2年ほど前、大乃国が大関に昇進する際、「社長にぜひ、後援会長になっていただけませんか」と直訴したのが筆者 (黒田) だった。1986年の初夏だったと記憶している。アイスホッケーと大相撲を道新スポーツ記者として東京で担当していた筆者は、羽田から千歳に向かう飛行機の中に雪印乳業役員で、当時アイスホッケー部のオーナーだった高田哲夫氏の姿を見つけた。羽田空港を離陸し、シートベルトのサインが消えたところを見計らった高田哲夫



▲雪印メグミルクのホームページで笑顔を振りまく原田雅彦氏



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)